

「それだから、走るのだ。信じられているから走るのだ。
間に合う、間に合わぬは問題でないのだ。
人の命も問題でないのだ。
私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいものの^{ため}に走っているのだ。」

最後の死力を尽して、メロスは走った。
メロスの頭は、からっぽだ。
何一つ考えていない。
ただ、わけのわからぬ大きな力にひきずられて走った。
太宰治著 『走れメロス』より

人はなぜ、走るのだろう…。
走る行為の何が人を魅了するのだろうか。

「走る」について『日本大百科全書』はこう記している。
—初め、人間にとって「走る」ということは生きることであった。つまり、狩猟によっ
て、その日の食糧を得ていた時代の人間は、動物と走力を競うことが、そのまま生きるこ
とにつながっていたのである。— また、「走ることの意義」について、—「走る」という
ことはいうまでもなく空間移動 locomotion の一つであり、より速く空間を移動しようと
いう欲望は、あらゆる時代において人類がもち続けてきた夢であった。— と述べている。



大地を駆け抜けていくための優美な躍動感と筋肉の巧みな調和。
人類は走るために進化し、走ることによってさらなる進化を遂げた。
長い人類史のなかで、人はさまざまな理由で走ってきた。
援軍を求めるため、勝利を伝えるため、神に祈りを捧げるため、もっと速く、もっと遠くへ—
いったい人はなぜ、そうまでして走るのか。
トル・ゴグス著 『なぜ人は走るのか』

陸上競技とは、人間の行動の三要素、走る・跳ぶ・投げることを基本にして、スポーツ的に体系化してつくられた競技である。



〔歴史〕 始まりは古代オリンピックから～

陸上競技が、完成された純粋なスポーツとして発達したのは18世紀以降であるが、その起源は古く古代にさかのぼる。

原始時代、人類が獲物を追って走り、跳び、槍や石を投げた動作が原形といえるが、競技としての陸上競技は、紀元前776年にギリシャのオリュンピアで開かれた古代オリンピック第1回大会が記録に残っている。

古代オリンピックで行われた競技は、スポーツというよりは、父なる神ゼウスのための祭典競技であり、神の儀式の一部としての役割を果たしていた。この大会は4年に一度行われ、393年まで続けられた最も古くて長い大会である。この大会で行われた競技は、陸上競技をメインとしており、はじめは短距離のみであったが、14回に中距離、15回に長距離、以後古代五種競技、円盤投げ、やり投げ、走り幅跳びと増え、レスリングやボクシングも加えられた。

ローマ時代に入ると、もともと宗教上の祭典であったことから、異教徒のローマ皇帝によって禁止されてしまう。以後中世を通じて、ほとんど開催をみず、近代オリンピックが行われる19世紀まで待たなければならなかった。

18世紀から19世紀にかけて運動競技が見直され、各地で競技が行われたりしたが、運動会的な範囲を出なかった。1880年(明治13)にイギリス陸上競技協会が設立され、1896年(明治29)には、クーベルタン男爵の提唱によって第1回近代オリンピック大会が、ギリシャのアテネで開かれた。陸上競技が本当の意味での国際競技になったのはこの時からである。以後、陸上競技はつねにオリンピックのメインイベントとして位置づけられ、今日に至っている。



〔日本の陸上競技〕 Athletic Sports 登場～

日本には明治初期にイギリス人やアメリカ人によって陸上競技が紹介された。近代的な形での陸上競技が始まったのは、1874年(明治7)のことである。

その年の3月21日、東京の築地にあった海軍兵学寮(後の海軍兵学校)でイギリス海軍ドーグラス少佐の指導によって「競闘遊戯会」(Athletic Sports)が開催された。続いて1878年(明治11)5月に、札幌農学校のクラーク博士によって同校で第1回遊戯会が行われ、1883年(明治16)6月にはイギリス人ストレンジの主唱により東京帝国大学で運動会が開かれている。この東京帝国大学の運動会は途中衰退の時期もあったが、1911年(明治44)まで約30年にわたって続けられ、以後の日本の陸上競技会に大きな影響を与えた。(東京大学運動会時代とも呼ばれる。)

夏目漱石の名作『三四郎』に、三四郎が東京帝大の陸上運動会を見に行く場面がある。

「二百メートルの競走が済んだのである。(中略) 1番に到着したものが、紫の猿股をはいて婦人席の方を向いて立っている。ああ背が高くては1番になるはずである。計測係が黒板に二十五秒七四と書いた。」

これは漱石のフィクションではない。1904年(明治37)年11月12日に行われた運動会の実況だったのである。

200mで優勝した「紫の猿股を履いた学生」は、法科の藤井実という学生だった。注目を引くのは、25秒74という記録である。

その頃「競走時計」の名称で、ストップウォッチが市販されていたが、その多くは5分の1秒単位であった。25秒74といえは100分の1秒単位で、手動の時計で計れる記録ではない。

まさしくこのとき、日本で初めて、あるいは世界でも初めての電気時計が使われていたのである。それは東大の物理学教授、^{たなかだてあいきつ}田中館愛橋博士(後に1944年文化勲章受章者)が開発した装置であった。

黒板に記録を書いた計測係こそ田中館博士の助手で、漱石の門人でもあり、後に多くのすぐれたエッセーを書いた寺田寅彦であった。

この電気計時機はすでに1902(明治35)年の運動会でも使われていた。その運動会は、11月8日に行われたが、そのとき22歳の法科学生、藤井実が100mで優勝し、電気計時は、10秒24を記録した。

当時は国際陸連もなく、公認記録はなかったが、1900年に米国選手が作った10秒8が世界記録とされていた。したがって藤井の10秒24はこれを大きく破った世界新記録ということになった。まさに日本人による世界新記録第1号である。

(中略)

藤井は10秒24を回想した談話の中で語っている。

「漱石に書かれた紫の猿股は、母が古い着物の裏地をほどこいて作ってくれたものです」

『日本陸上競技連盟七十年史』

1911年(明治44)、大日本体育協会が結成され、翌年の第5回オリンピック・ストックホルム大会の予選会が東京羽田で開かれた。選考された短距離の三島弥彦、マラソンの金栗四三はオリンピックに参加したが惨敗だった。しかしこれを契機に日本の陸上界はしだいに力をつけていった。

(※) ^{みしまやひこ}三島弥彦 (1886(明治19)～1954(昭和29)) 日本人初のオリンピック参加選手。東京生まれ。学習院から東京帝国大学を卒業。学生時代から万能選手として鳴らした。とくに陸上の短距離は得意で、1912年(明治45)の第5回オリンピック・ストックホルム大会にマラソンの金栗四三と二人で、日本人として初のオリンピック参加選手となった。100、200、400mに出場したが、いずれも予選通過程度で終わった。このときの入場式にプラカードがあることを知らず、二人で相談の結果、国名をNIPPONとして入場行進した。NIPPONはこれ一度だけ

で以後は JAPAN となっている。学者肌でひげを生やしており、ストックホルムでもひげをだいに手入れしていたという。『日本大百科全書』

(※) ^{かなくりしそ}金栗四三 (1891年(明治24)～1983年(昭和58)) 陸上競技マラソン選手。熊本県玉名郡出身。東京高等師範学校卒業。日本選手がオリンピック大会に初参加した1912年(明治45)第5回ストックホルム大会の参加者二人のうちの一。このときのマラソンは15^キで棄権したが、1920年(大正9)のアントワープ大会(16位)、1924年のパリ大会(途中棄権)と計3回出場。日本のマラソン史には欠くことのできない人である。この間、下関—東京、樺太—東京間などを走破したマラソン界の長老である。熊本県教育委員会委員長、日本陸上競技連盟会長などを歴任。教育、スポーツ界に尽くした功績で、1956年(昭和31)には紫綬褒章を授与されている。『日本大百科全書』



【マラソンの歴史】 その起こりは古代ギリシャの歴史の中に～

【マラソン】 陸上競技の一種目。42.195 km を走る長距離のロードレース。紀元前 490 年、アテナイがマラトンの戦でペルシアの大軍を破ったとき、一人の兵士がアテナイまでの約 40 km の道を走って勝利を告げ、そのまま息絶えたという。1896 年(明治 29)の近代オリンピック第 1 回大会(アテネ)が開かれる際、フランスの言語学者 M.ブレアルがこの故事にならいオリンピック種目にマラソンを入れることを提唱、正式種目となった。このときはマラトンの古戦場からアテネの競技場まで約 40km だった。(略) 国際陸運は 1924 年(大正 13)の第 8 回パリ大会から現行の 42.195km に統一した。『世界大百科事典』



【日本のマラソン】 マラソンの父 金栗四三～

日本で長距離走が行われるようになったのは明治後期のこと。はじめて“マラソン”の呼び名が使われたのは、1909 年(明治 42)、大阪毎日新聞主催で約 20 マイルの神戸—大阪間を走る「マラソン大競走阪神間二十哩^{まいる}長距離走」からであった。スタート地点は湊川埋立地、ゴールは新淀川西成大橋東端。408 人の申込者から選抜した 20 人での「マラソン大競走」は、現在と変わらぬほど綿密に企画され厳密に運営された。

1911 年(明治 44)に行われた翌 12 年のストックホルム・オリンピック国内予選会で、のちに日本の〈マラソンの父〉といわれた金栗四三が優勝しオリンピックに初参加(途中棄権)。以来、マラソンは日本の人気種目の一つとなり、オリンピックでは 1936 年(昭和 11)のベルリン大会で孫基禎が優勝したのをはじめ、戦後も入賞者を出している。

逆境をバネに後進の育成に努めた金栗は、箱根駅伝の他、福岡国際マラソン(金栗賞朝日マラソン)を創設、1983 年(昭和 58) 92 歳でこの世を去るまでマラソンの普及に努めた。

長距離競走のブームが続く中で、陸上競技に新しい分野が開かれた。長距離リレー、すなわちこれが「駅伝競走」の始まりである。

【**駅伝制度**】 駅伝とは、通信および交通制度の一つの形態であり、駅制とも、^{えきてい}駅通ともよばれてきた。現在盛んに行われている駅伝競走も、この制度に由来する。駅の本字は「驛」であり、馬偏がついているように、宿場に備えられた継立て用の馬のことをさした。転じて宿場の意味になり、宿駅ともいう。古代の日本では、驛を「うまや」と訓じた。伝の本字は「傳」であり、宿場における継立て用の車馬を意味した。字の中に「車」という字が含まれているように、傳は宿場の車もしくは馬車をさした。転じて、馬車を備えた宿場の意味に用いられるようになる。あわせて駅伝という。

『日本大百科全書』

【**日本の駅伝制度**】 馬による急使の往来は、すでに大化前代にみられる。大化改新の^{みことりのり}詔（646）で、^{えきば}駅馬、^{てんま}伝馬を置くことが示され、701年（大宝1）の^{たいほうりょう}大宝令によって制度的確立をみた。律令国家の中央集権政治のもとで、中央と地方とを結ぶ官吏、公使の旅行、政令伝達、報告など、交通、通信に大きな役割を果たした。律令国家の衰退とともに11世紀以降崩壊したが、人馬による全国交通の骨格がつくられ、中世、近世に及ぶ宿駅制への原型となった。

『日本大百科全書』

～駅伝競走事始め～

【**駅伝競走**】 道路上を走る長距離のリレー競走。距離、区間、人数にとくに規定はないが、一般的には5～10区間、一人が走る距離は5～20^キとなっている。各走者は自分の区間を走ったあと、たすきを次走者に渡す。たすきはつねに肩に掛けて走らないと失格する。

『日本大百科全書』

日本初の駅伝は、1917年（大正6）4月27日から三日間にわたった「^{てんと}真都記念東海道五十三次駅伝徒歩競走」（「東海道五十三次駅伝競走」）である。京都から東京へ首都が移って50年、その真都記念行事として読売新聞社が企画し行われた。京都三条大橋から東京上野^{しのぼずのいけ}不忍池までの508km（516kmという説もある）23区間を昼夜問わずに走り続け、東軍対西軍で競走した。東西のアンカーは東軍金栗四三、西軍日比野寛で両者日本マラソン界の歴史に名をとどめる名選手であった。金栗四三の走りぶりを見ようと、東京では浴道に人が溢れ出たため走路が狭くなり金栗も満足に走れなかったほどだったという。レースの結果は精鋭選手を集めた上にアンカーがオリンピック帰りの主将金栗四三の東軍が大差をつけて勝利している。

大正時代の金栗は神奈川師範学校や独協中学で教師をしながらオリンピックを目標として自らを鍛え、マラソンなどの長距離走の普及に尽くした。この「東海道五十三次駅伝競走」の企画実現のためにも奔走した。駅伝の長所は、冬季トレーニングの他に、数多くのマラソン選手や中距離走者を養成出来ると金栗は考えていたのである。

「駅伝」なるレースは、この大会をきっかけとして日本中に広まり日本特有の長距離走レースに発展していくのである。

外国でのロードレースとしてはグラウンドを離れ道路あるいは山野を走るクロスカンントリーが盛んであるが、駅伝のようにたすきを手渡し、各区間ごとにリレーでつなぐ形式のものは珍しい。

土岐善麿は、『駅伝五十三次』の中で、『読売新聞八十年史』（昭和30年12月1日発行）に次のような記述があると紹介している。

長距離競争の効果

東京高等師範学校校長 加納治五郎氏は語る（二月十三日付）

走る—その中にも短距離と長距離との二種あるが、この二種の長短を考へると、短距離の競走は大半技術のものであつて、長距離の体力と精神と二つながらの練磨となるには若くない。そこで私は日本体育会の人々とも協力し、殊に長距離競走を奨励して来たのである。もちろん競走以外の体育も十分に尊重する。短距離も等閑に附するわけではないが。高等師範では長距離の競走に最も重きを置き、且つこれを社会に薦むる手段として、毎年二回、一回は大宮から、一回は多摩川から東京までの長距離レースを行ふことに定めたのである。爾來幾多の経験に鑑みて、ますます長距離レースの有益であり、いささかの弊害を伴はぬといふ確信を得ると共に、私は是非東海道を踏破する快挙を起してみたいと思ふに至つた。何となれば、東京でやるレースは、東京附近の注意を喚起するに過ぎないで、広い他の地方はなほまだ眠つて居る。若し先づ最初に東海道に試みて、それから東北九州と、順次到大競走の行はるる導火となれば、ここに初めて国民全般が長距離レースに覚醒するわけである。（略）

【箱根駅伝】 新春の風物詩である箱根駅伝（「東京箱根間往復大学駅伝競走」）は、1920年（大正9）「四大校（早稲田・慶応・明治・東京高師）駅伝競走」の名称で開催されたのが始まりである。東京～箱根間（217.1キロ）の10区間を二日間で往復した。

日没後には地元の青年団が松明を持って伴走したという。第1回大会は東京高師が優勝した。年々参加校が増え、規模も大きくなったが、第2次世界大戦時に一時中止、戦後復活した。1955年（昭和30）から正月二日、三日に実施されるようになった。現在、出場校はシード校10校プラス予選を勝ち抜いた10校の計20校と、関東学生連合を加えた21チームで勝敗が争われる。2024年（令和6）には第100回記念大会となる、非常に歴史ある大会で人気も高い。2004年（平成16）から箱根駅伝の創始者でもある金栗を讃え、最優秀選手に「金栗四三杯」が授与されている。

また、出雲駅伝（出雲全日本大学選抜駅伝競走）、全日本大学駅伝（全日本大学駅伝対抗選手権大会）は、箱根駅伝の前哨戦と呼ばれ、この二大会と箱根駅伝を合わせて大学三大駅伝と称される。同シーズンにこの三大会でのタイトルを獲得することを三冠という。これまで、1990年度に大東文化大学、2000年度に順天堂大学、2010年度に早稲田大学、2016年度に青山学院大学が達成している。

出雲駅伝 … 毎年体育の日に開催される。出雲大社をスタートし、出雲ドームに向かう6区間、44.5kmのレース。（1989年（昭和63）～）

全日本大学駅伝 … 毎年11月の第一日曜日に開催。熱田神宮から伊勢神宮までの8区間、106.8kmで争われる。（1970年（昭和45）～）

～駅伝の名付け親 武田千代三郎～

“駅伝”の名称は、東海道五十三次駅伝競走主催の読売新聞社社会部長土岐善麿（とぎぜんまる）（歌人）が、大日本体育協会副会長武田千代三郎（神宮皇學館館長）に図り命名した。東海道五十三次にちなみ江戸時代の伝馬制にヒントを得たと伝えられる。

（※）**土岐善麿** 1885～1980（明治18～昭和55） 明治・大正・昭和期の歌人・国文学者。出生地東京。号を哀果。早稲田大学。卒業後、読売新聞社に入り、1918（大正7）朝日新聞社に転じ、'40（昭和15）に退職するまで長く記者生活を続けた。歌人としては中学時代金子薫園の〈白菊会〉に参加、大学時代窪田空穂・若山牧水の影響を受けて、'10（明治43）処女歌集「NAKIWARAI」を出版。ローマ字による3行書きと、新鮮な抒情で注目を集めた。翌年石川啄木と知りあい2人で雑誌「樹木と果実」創刊を計画、啄木の病状悪化などのため目的は果たされずに終わったが、啄木とともに社会主義的思考を進めながら生活派短歌の基礎を作った功績は大きい。（略） 『コンサイス日本人名事典』

土岐善麿は自著『駅伝五十三次』の中で次のように記している。

二月九日付読売の紙面には、この画期的企画の大綱が大々的に発表された。（略）

真都記念 マラソン・リレーの概要

▼四月二十八日出発、東海道の徒歩大競走

▼参加選手の歓迎、細則は三月一日発表真都記念マラソン・リレーは何ぞその名称の新鮮にして、その計画の世界的なる。（略）

この記事に接して今昔の感を深くするが、五十数年前の東海道には、まだ国道一号線は開通せず、江戸時代の参勤交代で大名が往復した旧東海道を通った。また鉄橋も完備せず、浜名湖などは渡船で渡ったのである。駅伝競走の規則に渡し場の渡り方が記されていたことは、わが国スポーツ界の興味ある資料となろう。

この予告のでた二月上旬には、まだ「駅伝徒歩競走」という名称は決まっていなかったことがわかる。それまではマラソン・リレーと呼んでいた。「駅伝」の名称は、『三代実録』にある「駅伝貢進」、『楽部式』に「諸国駅伝馬」とあるものから採ったといわれる。

（※）**武田千代三郎** 1867～1932（慶応3～昭和7） 明治・大正期の体育・スポーツ指導者。東大在学中、イギリス人教師ストレンジからスポーツを学び、スポーツの普及を志す。内務省に入り、秋田県、兵庫県の知事を歴任。県内のスポーツ奨励に努力し、初めて知事の賞杯や優勝旗を出す。1911（明治44）嘉納治五郎を助けて大日本体育協会の創立に参画し、副会長となる。'17（大正6）読売新聞社が遷都50年記念事業として京都・東京間のリレー競争を挙行したとき、初めて〈駅伝競争〉と命名した。著書「理論実験・競技運動」（1904）は日本人による最初の体系的スポーツ指導書として有名。 『コンサイス日本人名事典』

駅伝の名付け親である武田千代三郎は神宮皇學館第六代館長でもあった。

神宮皇學館について、昭和43年(1968)発行の『伊勢市史』は次のように記している。

「神宮皇學館」は「神宮教院」が閉鎖された翌年に当る、明治15年(1882)4月30日に、林崎文庫内に創設されたもので、皇学研究が目的であった。明治20年(1887)10月、浦田町に新校舎を設け、高等小学卒業以上のものを収容し、古典・国文・国語を修学させた。明治26年(1893)には本科のほかに、研究科・専科を設けて専門教育の場をつくり、明治36年(1903)8月、勅令で官立内務省管下の専門学校となった。大正7年(1918)、倉田山の新校舎に移転したが、この間たびたびの学制改変があった。昭和15年(1940)4月になって、内務省所管の専門学校から、大学令による「神宮皇學館大学」に昇格した。その後、敗戦によって昭和21年(1946)3月、占領軍の神道指令を受けて廃校の止むなきに至り、64年間の歴史を閉じることになった。

(注)現在の神宮皇學館は、昭和30年4月に設立されたもので、神道教習科と神道研究科の二科にわかれ、神職の養成と神宮学の研究を目的としたものである。

『皇學館百二十周年記念誌—群像と回顧・展望—』(平成14年(2002)発行)は、武田千代三郎について詳細に紹介している。

武田千代三郎 慶応三年(1867)―昭和七年(1932) 神宮皇學館館長・第六代
慶応三年四月二十四日福岡県山門郡三橋村柳河六六二番地で父柳河藩士武田通夫、母カネの次男として生まれる。明治二十二年東京帝国大学法科大学卒業後は内務省官吏として奏任官時代を広島、長野、群馬、兵庫各県に歴任、勅任官となってからは明治三十二年より秋田、山口、山梨、青森と四県の知事として大正二年の退官まで終始地方行政を掌理、当時としての典型的な至誠謹直な牧民官であったことは幾多の記録から知ることができる。

地方官退官後は大正二年九月に神宮皇學館館長、大正七年四月には大阪高等商業学校校長に任用されることになるが、東大在学中イギリス人の御傭英語教師フレデリック・ウィリアム・ストレンジとの出会いがあり、この出会いが武田の生涯に極めて大きな影響を与えることになる。(略)

ストレンジの指導によって陸上運動の本質に触れた武田は、在学中は勿論卒業後の地方官時代、神宮皇學館、大阪高等商業学校在職中も異常なまでの情熱を陸上運動の研究と奨励に注ぎ、論文や著書にも収めている。明治三十七年出版の『理論実験競技運動』は競技スポーツの意義、人体と運動、運動技術、競技会運営に至るまでを細かにまとめた日本初の本格的なスポーツ書である。「スポーツマンシップを身につけた立派なスポーツマンであれ」と繰り返し解いたストレンジの情熱的な教えは、「スポーツのあるべき姿」として武田の身魂に深く刻み込まれていたことは、この書からも察することができる。

当時の武田は地方長官としての激職中も、機会ある毎に陸上運動の真価を解き、自ら講習会を計画して教育関係者や学生達に指導している。特に兵庫県書記官時代には自らの体験に理論を加え、体重軽減の手段として「水抜き油抜き」練習法を県立御影師範の生徒に指導して、京都大学主催の第一回競技大会で優勝へと導いたことは有名である。(略)

平成30年(2018)神宮皇學館は倉田山に移築して百年の節目を迎えた。この移転を主導したのが武田千代三郎であった。

『皇學館学園報』(学校法人皇學館企画部発行・編集)は第77号(平成30年12月10日発行)に特別企画「倉田山移転百年」として、当時の写真とともに倉田山移転にかけた武田館長の思いと足跡を振り返り詳しく掲載。その頃の様子が窺える。

移転の理由は、築20年を経た館町校舎(明治29年竣工。現、神宮司庁宇治工作所敷地)の老朽化と、低湿のため「梅雨時は勿論の事一寸劇い雨になるといつでも畳を上げる位の懸念」(『五十年史』)があったという地理的環境にある。」とされる。移転先としては高燥清雅の地が求められ、「宇治は土地狭隘であり、山田は卑俗に失する。」(『五十年史』)として、先に御幸道路が開通(明治43年)して交通の便もよく、神宮徴古館・農業館(明治44年から神宮所管)も建つ倉田山が候補地とされた。丘陵地のため飲料水確保に不安もあったというが、試掘の結果は良好で、倉田山への移転が決定されることとなった。

トラックやフィールドをもつ当時画期的な運動場(昭和12年、日本陸上競技連盟より第三種公認)の計画も武田館長ならではのものだが、「これ(倉田山移転計画)こそ武田館長の名を一日も我等をして忘れしめない所」(『創立六十年記念誌』)と評されるごとく、武田館長の倉田山移転に果たした功績は極めて大きいといえる。

また、『皇學館百二十周年記念誌—群像と回顧・展望—』でもその手腕を発揮し彼の功績が極めて大きかったことが理解できる。

神宮皇學館での武田の業績は、館町校舎から倉田山丘陵への移築である。地方行政在任中の経験を工事に生かし、就任後まだ浅い時期ではあったがこの大事業に着手、大正七年には完成を果たしている。その間校内に当時としては理想的な陸上競技場(一周三百m)が新設されるが、この工事にかかる武田の情熱は並々ならぬものがあった。「(略)その工を起こすや晨に改築事務所の小屋に自らストーブを焚き、夕には工匠と共に月を踏んで帰り、或はコンパスを採って製圖し或は耒耜を以って地を相す」。『館友』に記されたこの文章からも察せられるように、館長自ら工夫と共に汗を流す日々であった。建設の目的は勿論本学スポーツの振興であったが、別に膨大な構想を抱いていたことを見逃してはならない。「神宮競技」の開催である。即ち伊勢の地で日本初の全国国民運動会を開催することである。「一年に一度これを開催する」。武田は記者を前に目を輝かせて抱負を語ったそうである。しかし競技場の完成を待たずに突然大阪への転任(当時の大阪市長の懇請によるもの)が決まり、実現には及ばなかった。神宮皇學館の競技場完成から五年後の大正十三年、内務省によって明治神宮外苑競技場(一周四百m)が建設され、同年第一回明治神宮競技大会が開催されたが、その主旨と基本構想は曾て武田が抱いた「神宮競技」とほぼ似通った形で実施された。大会開催に当たっては、当然武田の助言、指導がなされたと考えられ、このことは神宮皇學館陸上競技場に託した夢を、ここ明治神宮競技場で実現させたことになろう。倉田山グラウンドの建設は誠に意義深いと言える。

「駅伝」の名称は武田千代三郎が神宮皇學館在任中の大正六年（1917）に彼が命名し誕生した。武田の陸上競技会への貢献は益々活気を呈することになった。

神宮皇學館での武田のスポーツへの思いや学生達への接し方は次のように綴られている。

此のころ学生間でも全国的に運動競技の興隆が見られるようになるが、当時の神宮皇學館のスポーツへの関心は誠に不十分な状態であった。学生の病死が後を絶たないなか、武田は心身共に強健な学生を育てる一念から、放課後の陸上運動指導の手は緩めなかった。厳にして温、献身的な武田の実践指導は徐々に学生達の心を捕らえ、関心が高まると同時に、先に記した「神宮競技」の主旨と構想にも、学生を含む本学関係者は大いに賛同したということである。

このように熱心に運動を奨励、指導はするが、スポーツ本来の姿の薄れかけた学生の放縦は断固として許さなかった。「学問と運動の両立」はあくまでも武田の信念であった。一方学生と親しく接することを心から望み、食事を共にするなど人間的な触れ合いを大切に、その中で時には厳父として、慈父として慈愛に満ちた教育を行ったのである。

『皇學館百二十周年記念誌—群像と回顧・展望—』

昭和3年（1928）6月転任先の大阪高等商業学校を依願退職するが、その後は余生を静岡県御殿場で過ごし、昭和7年（1932）5月26日、65歳の生涯を閉じた。

地方行政、教育、スポーツの発展に人生の大半を燃やし続けた武田千代三郎。明治後期から大正初期にかけての我が国陸上競技界に与えた影響は計り知れない。

運動の為に学業を忘るゝが如きは最も戒めなければならぬことである。然れども今の学生が運動する暇がないとの口実の下に、却て佚楽を貪らんとするの傾向あるは歎ずべし。

『理論実験競技運動』

学業と運動の両立を信念とした彼の思いはこの言葉に込められている。

皇學館倉田山移転百年の年（平成30年）、皇學館駅伝競走部は10月8日に行われた第30回出雲駅伝に初出場し、14位と健闘、2年連続2回目となった11月4日の第50回全日本大学駅伝では18位でゴールテープを切った。両大会とも次の年の東海地区出場枠「2」を確保し、先へと繋げている。

この年の6月全天候型に大幅改修されたというグラウンド。

選手たちはさらにレベルアップを目指している。

「皇學館」の誇りと伝統をたすきでつないで全力で駆け抜けるために—。

倉田山移転にかけた武田千代三郎の強い志は、倉田山の歩んできた道のりとともに語り継がれていくであろう。

「日本マラソンの父」と呼ばれた金栗四三は日本人初のオリンピックの一人。
ストックホルム五輪での惨敗が原動力となり、マラソンの強化を目指した。

その経緯から生まれた構想が駅伝である。

令和初となる2020年、箱根駅伝は100周年を迎えた。

「駅伝」の名付け親と言われた武田千代三郎。

その生涯はスポーツの発展のために奔走し続けた日々であった。

彼が情熱を注いだ皇學館の倉田山への移転。

その功績の賜物は、

今、100年の時を経て後世に受け継がれている。

「世界中の青空を全部東京に持ってきてしまったような、素晴らしい秋日和でございます。」

1964年（昭和39）10月10日、東京オリンピック開会式。

国立競技場の真上の空は雲一つない青空だった。

午後二時、各国選手団の入場がはじまり、それが蜿蜒とつづくのがいかにも喜ばしい。祭りには行列がつきもので、行列は空間と時間とを果物かごのように一杯に充たしてくれなくてはならぬ。（中略）日本選手団の赤一色のブレザー群の入場にもまして、今日の開会式の頂点は、やはり聖火の入場と点火だったといえるであろう。

その何気ない登場もよく、坂井君は聖火を高くかかげて、完全なフォームで走った。ここには、日本の青春の簡素なさわやかさが結晶し、彼の肢体には、権力のほてい腹や、金権のはげ頭が、どんなに逆立ちしても及ばぬところの、みずみずしい若さによる日本支配の威が見られた。この数分間だけでも、全日本は青春によって代表されたのだった。そしてそれは数分間がいいところであり、三十分もつづけば、すでにその支配は汚れる。青春というのは、まったく瞬間のこういう無垢の勝利にかかっていることを、ギリシャ人は知っていたのである。（略）

『三島由紀夫スポーツ論集』

古代ギリシャから東京1964、そして東京2020へ—

昭和から平成を経て令和へ—

その時代、その時、一瞬の輝きのために、歴史を繋ぐために

人は走るのかもしれない。



東京2020オリンピック7月24日（金）～8月9日（日）

パラリンピック8月25日（火）～9月6日（日）

図書館だより3月号 No.217 増刊 ふるさとの風 令和二年弥生 令和二年(2020)3月1日発行

（編集・発行）伊勢市立伊勢図書館 指定管理者／株式会社図書館流通センター （住所）〒516-0076 伊勢市八日市場町13-35
（電話）0596-21-0077 （FAX）0596-21-0078 （ホームページ）<http://iselib.city.ise.mie.jp/>

© 2020 mami ishikura



【参考文献】

- ・日本陸上競技連盟七十年史 日本陸上競技連盟七十年史編集委員会／編 日本陸上競技連盟 782／ニ
- ・スポーツ（日本史小百科26） 田中徳久・吉川久美子／著 近藤出版社 780.2／タ
- ・なぜ人は走るのか ランニングの人類史 トル・ゴタス／著 楡井浩一／訳 筑摩書房 782.3／ゴ
- ・駅伝五十三次 土岐善磨／著 蝸牛社 915.6／ト
- ・マラソンと日本人 武田薫／著 朝日新聞出版 782.3／タ
- ・大学駅伝よもやま話 出口庸介／著 ベースボール・マガジン社 782.3／デ
- ・箱根駅伝コトバ学 生島淳／著 ベースボール・マガジン社 782.3／イ
- ・箱根駅伝に賭けた夢 佐山和夫／著 講談社 782.3／サ
- ・金栗四三の生涯走れるランニング術 本條強／著 日本経済新聞出版社 782.3／ホ
- ・日本大百科全書 3・5・18・22 巻 小学館 R031／ニ／3・5・18・22
- ・世界大百科事典 27 平凡社 R031／セ／27
- ・コンサイス日本人名事典 三省堂編修所／編 三省堂 R281.03／コ
- ・伊勢市史 伊勢市／編 伊勢市 L243／イ
- ・皇學館百二十周年記念誌—群像と回顧・展望— 皇學館百二十周年記念誌編纂委員会／編 学校法人皇學館 L377／コ
- ・皇學館学園報第77号（平成30年12月10日） 学校法人皇學館企画部／発行編集
- ・三島由紀夫スポーツ論集 佐藤秀明／編 岩波書店 780.4／ミ
- ・理論実験競技運動 武田千代三郎／著 博文館 L780／タ （三重大学所蔵）
- ・読売新聞 2019（令和元）年12月31日